

平成29年度 発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業
(発達障害の可能性のある児童生徒に対する教科指導法研究事業)
成果報告書

実施機関名 (宮田村教育委員会)

1. テーマ

発達障害またはその可能性のある児童の実態を把握するとともに、通常学級においても個に応じた国語、算数の適切な指導の工夫や仕組みを構築し、インクルーシブ的な学級経営につなげる。

2. 問題意識・提案背景

宮田村教育委員会では、近年の発達障害の可能性のある児童が増えている現状を捉え、「一人も見捨てない」を合い言葉に、上越教育大学西川純教授の提唱する『学び合い』を生かした国語、算数の教科における支援の在り方を研究し、通常学級の学習においても有効な指導の在り方を求めてきている。

また、発達障害の可能性のある児童に有効だといわれる iPad 等を活用し、個に応じた利用の仕方を作成する、特性に応じた教具教材の活用や工夫をする、『学び合い』と適切な個別指導を組み合わせた教科指導の在り方の研究を進めている。なお、その過程で学習に困難さを抱える児童が、「かかわる」「わかる」「できる」というような喜びや達成感を得られる指導についても触れ、効果的支援の在り方を研究してきた。

3. 目的・目標

学習時に自席で集中して学習に取り組むことができず、歩き出したり、ちょっかいを出したり、大きな声を出してしまう児童が近年増加しており、他の児童の学習を妨げたりする行為が見られるようになってきている。また、指示された教科書のページが分からなかったり、聞かれている内容を把握できなかったりすることなどが原因で、問題に取り掛かることができない児童も増えている。

そこで、『学び合い』を取り入れ、積極的な参加型共同学習を行うことにより、学力の底上げを狙うことを目的とした。また、『学び合い』では教える側の児童の理解を深め、意欲を向上させたりすると共に、教えられる側は分からないことを自分から進んで尋ねる態度をもち、課題を理解できる、分かる喜びを得られることを目標とした。

一方、一人ひとりの学習における教材教具の選定・開発の研究や指導における配慮が必須と考えた。特性のある児童に有効であるといわれる iPad を、個々の児童に応じたソフトや活用法を研究したい。また、道村式漢字学習法やMIIMの活用により「読み書き」の学力向上を図り、問題や課題の意味を理解する力を向上させ教科学習に役立てたり、他人との会話や長文の読解力を高めたりしたい。

4. 主な成果

- (1) 『学び合い』を通して、「かかわる」「わかる」「できる」喜びや達成感を味わうことができ、自発的に学習に取り組む姿勢が根付いてきた。また、自他の良い所や特性を認め合うことから意欲的に学ぶようになってきた。
- (2) 全職員が、発達障害に関して研修を積むことにより、個々の児童への理解が進み、一人一人を大切にす学級経営、学習指導の質が向上してきた。また、Q-Uテストのデータを有効活用することにより、経験や勘に基づかない科学的な学級づくりが可能になってきている。さらに、人間関係を考慮したインクルーシブな学習集団へと変容しつつあり、通常の学級指導につながるケースが出てきている。
- (3) 繰り返しのドリル学習や指導書に頼った説明による指導では学習に困り感を持ち、意欲をもちにくく、学力の向上に結びつきにくい児童へ、道村式漢字学習法や「読み書き」に関わるMIMの活用、タブレット学習により、抵抗感を取り除きつつ、学習に向かえる場面が出てきている。
- (4) 保育園（村内2園からの入学がほとんど）との連携による就学時の情報交換や園参観による児童理解と新入生受入体制の整備を行っている。年中児より発達障害の診断、あるいは可能性のある児童の情報を共有し、入学直後から学習習慣の意識付け、習慣化を行い、学習への集中維持、理解促進を図ってきた。多動傾向の児童が落ち着きを見せ、教室を飛び出す児童は今年度0名、離席する児童もいない。

5. 取組内容

1. 発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業運営協議会の設置状況
 - (1) 構成員（16名）
 - ・有識者5名（西川 下山 両川 堀内 道村）
 - ・指定校5名（校長、教頭、委託研究事業担当教員3名）
 - ・スクールカウンセラー1名
 - ・PTA会長1名
 - ・事務局4名（教育長 次長 学校教育係長 研究推進員）
 - (2) 活動内容
 - ・有識者による講演・研修会終了後構成員による懇談及び研究の方針確認
 - ・実態把握のスクリーニング実施及び分析、教科指導法の検討
 - ・ICT活用の有効性について研修及び活用
2. 教科教育スーパーバイザーの配置状況
 - (1) 構成員（3名）
 - ・下山真衣 信州大学教育学部学術研究院（教育学系）助教
 - ・堀内澄江 阿南町立大下条小学校 校長
 - ・道村静江 道村式漢字学習方法指導者
 - (2) 活動内容
 - ・下山先生による発達障害の可能性のある児童の把握
 - ・堀内先生による「国語、算数」等におけるつまずきのある児童の指導
 - ・道村静江 道村式漢字学習方法指導（国語：「漢字、言語、書写」）

① 教科の学習上のつまずきなど特定の困難を示す児童生徒に対する指導方法及び指導の方向性の在り方の研究

★1. 小学校 国語科

★2. 長野県宮田村立宮田小学校 全学年

★3. 児童生徒のつまずきの状況

- ・音声や繰り返しの練習等で正確にひらがなを表記できない
- ・漢字の読み書きが修得できない、書くと形が整わない、枠をはみ出る
- ・文章の意味理解が難しい、問題の意図がとらえられない。

★4. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

① 実態把握の時期：10月～3月

② 実態把握の方法

- ・担任、研究部会職員による授業の観察
ノート、学習カード等からの判断
単元テストによる判断
- ・カウンセラー小澤エミ氏による授業参観による判断
- ・道村静江氏による授業指導による判断
- ・堀内澄恵氏（元県総合教育センター専門部指導主事、現阿南町立大下条小学校長）によるスクリーニングシートによる判断

★5. 実施した指導内容

① 学習上においてつまずいている内容

- ・聞く ・読む ・話す ・考える ・書く

② つまずいている背景・原因

- ・視覚認知、聴覚認知による問題
- ・音声と文字の整合性がとれていない
- ・語彙の不足

③ 指導方法（工夫した点（授業中、授業外））

- ・『学び合い』による教え合い、共同追究
- ・視覚支援的な補助教材（ICT、フラッシュカード等）
- ・道村式漢字学習指導

④ ③の結果（児童生徒の変容を含む）

事案1 5年A児の変容

4年時にこだわり感が強く学習への取組が消極的で、不登校傾向であったA児が『学び合い』の授業を繰り返し経験することで、「友だちとかかわって授業に参加」→「友だちの答えをそのまま写す」→「自力でまず考えるようになる」→「家庭学習への意欲増加、不登校傾向がなくなる、こだわりのバランス感覚が向上」

事案2 4年B児の変容

言葉や漢字の習得がやや困難なB児は、道村式漢字学習法により、月ごとの漢字のまとめテストが毎回50点程度であったものが、80点に向上。繰り返し書く学習では抵抗感があったB児が、自分から音声で行う道村式漢字学習を繰り返し行うようになった。また、B児の在籍する学級では、まとめテストの学級平均が70点台だったものが、道村式漢字学習法で行った後のテストでは88点に向上。85点以上の上位層も40～60%台の割合であったもの(9月まで)が80%台(10月以降)に向上した。

事案3 「イーリーダー」を使った音読学習 5年E児の事例

漢字が読めないこと、文節を切って読むことが困難であったことで音読に抵抗感のあったE児。集団で「。」読みを行っているときに、教科書の代わりにタブレットでアプリ「イーリーダー」を使用した。

漢字に全てルビがふられること、文字の大きさが自分で自由に調節できることで、操作し、文節に注意が向くようになり切れ目を理解できるようになった。さらに、漢字につまづくことがなくなり、途切れることが少なくなったことで、自信がついてきたこと、読むことに抵抗感がなくなったことが表情から伺えた。

⑤ 効果がある具体的な指導方法

- ・『学び合い』による友だちとかかわりながらの学習形態
- ・道村式漢字学習法の積み重ね MIMビジョントレーニング
- ・ICT機器を利用した音読学習

★6 まとめ

① 教科における学習上のつまづくポイント

- ・話を聞けない、理解できない認知に関する問題
- ・書くことに対する抵抗感
- ・情報選択の困難さ

② つまづくポイントにおける効果がある指導方法・内容

- ・学習習慣の形成
- ・聴覚、視覚の優位性を生かした指導

③ 事前につまづかないようにするための指導の工夫・内容

- ・個々の特性の傾向を分析、理解しておく
- ・低学年のうちに配慮点をとらえ対応し、学習ルールの習慣化
- ・自己肯定感のもてる声かけや評価

④ 通常の学級の授業における有用な指導方策

- ・問題の意図が分かるようなキーワード等の提示、問いかけ(言葉)
- ・特性をふまえた補助教材の活用
- ・『学び合い』における教え合い、かかわり合い

★1. 小学校 算数

★2. 対象とした学校、学年

宮田村立宮田小学校 全学年

★3. 対象とした児童生徒のつまずきの状況

引き算、割り算の計算のしくみの理解ができない
数的感覚の欠如、数字と実際の数が結びつかない
既習の算数的思考の長期記憶が困難
図形がとらえられない

★4. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

- ① 実態把握の時期：平成 29 年 4 月～10 月
- ② 実態把握の方法（実施者・方法）：授業者
 - ・担任、研究部会職員による授業の観察
ノート、学習カード等からの判断
単元テストによる判断
 - ・カウンセラー小澤エミ氏による授業参観による判断

★5. 実施した指導内容

- ① 学習上においてつまずいている内容
数概念の理解、計算処理、図形の理解、問題文の意味理解
- ② つまずいている背景・原因
 - ・数的感覚の欠如（数と実際が繋がらない、イメージできない）
 - ・記憶が十分でないために思考が途切れる
 - ・既習学習の活用が困難
 - ・図形の空間認知ができにくい
- ③ ①に対し実施した指導方法
 - ・問題文のキーワードへのマーキングや問いかけ
 - ・『学び合い』を生かした集中力の維持とかかわりによる問題の意図理解
 - ・具体物を使用しての数感覚、量感覚の理解、図や絵の活用
- ④ ③の結果（児童生徒の変容を含む）

事案 1 4 年 C 児の変容

算数の時間は教科書を開かない、問題を拒否する状況だった C 児が、算数の授業において『学び合い』を重ねることで、約半年間の間に「遠慮がちに友だちに教わる」→「自分から不明点をたずねる」→「分からない子に声をかける」→「あきらめかけている子を励ます」と変容していった。そして、「問題を読むときに気をつける言葉がわかってきたら、算数がおもしろくなった」と語った。単元テストにおいて、目標点 80 点を超えられなかった児童が、超えられる単元が出てきた。

事案2 3年T学級の変容

- ・算数の単元のテストにおいて、『学び合い』の場を多く設けた単元と全く用いない単元で比較を行った。発達障害の傾向があると思われる児童の平均点を比較すると前者は78.7点、後者は72.5点であった。『学び合い』を行うことが学習事項の定着の一因になっていると考えられる。

事案3 6年D児の変容

- ・全体指導で問題の理解が十分でなかったD児が、担任の個別の声かけや援助によって、キーワードを受けとめ、文章の意味がわかり、自力で学習を進めることができた。

⑤ 効果がある具体的な指導方法

- ・授業時における『学び合い』の場の設定
- ・具体物やICT活用による認知の個に応じた支援

★6 まとめ

① 教科における学習上のつまづくポイント

- ・問題や課題の意味理解
- ・題意に沿った思考
- ・数や図形の処理

② つまづくポイントにおける効果がある指導方法・内容

- ・『学び合い』における友だちとのかかわり合いの場
- ・問題の意図を理解するための支援
- ・視覚や聴覚など個に応じた教材

③ 事前につまづかないようにするための指導の工夫・内容

- ・個々の特性の傾向を分析、理解しておく
- ・低学年のうちに配慮点をとらえ対応し、学習ルールの習慣化
- ・自己肯定感のもてる声かけや評価

④ 通常の学級の授業における有用な指導方策

- ・問題の意図が分かるようなキーワード等の提示、問いかけ（言葉）
- ・特性をふまえた補助教材の活用
- ・『学び合い』における教え合い、かかわり合い

★7 その他

① 本事業のために教育委員会が実施した研修・指導主事の訪問等

宮田村教育委員会では、教育大綱「郷育『故郷に生き 故郷を愛し 故郷を創る』」を理念に、教職員の指導力アップを図り、『学び合い』を大切に、一人も見捨てないの3本柱を重点としている。

1. 上越教育大学教職大学院 西川 純 教授の指導による『学び合い』を生かした学習指導の在り方の研修を継続的に行った。
2. 道村静江氏の表現・理解につながる道村式漢字指導法の研修を行っている。
3. 堀内澄恵氏（元県教育センター主事、現阿南町立大下条小学校長）による児童の実態調査・理解と指導法についての指導

4. 本田祐介氏（伊那養護学校）による iPad の活用についての研修
5. 両川晃子氏による「発達障害にかかわる」講演と指導
6. 小澤エミ学校カウンセラーによる相談や参観（月1回：半日）
7. 下山真衣信州大学教育学部学術研究院（教育学系）助教による指導
8. 保育園、教育委員会、相談員、言語聴覚士等との連携による児童の実態把握や生い立ちの理解等、専門的支援を積極的に進めている。
9. 校内の調査、検査

② 本事業の月別の実施主な実施内容

月	日	内 容
6		Q-U（1回目）実施 『学び合い』の職員意識調査（1回目）
7	5	・西川教授と今年度の研究方針の確認や相談
	11	・全学級公開授業。『学び合い』の在り方や効果について、校内職員と参観者でグループ討議。また、西川教授の講演及び指導。
9		・『学び合い』に関する児童意識調査
10	13	・発達障害に関する書籍・教具等の作成実態の研修及び購入
		・道村氏と漢字習得に関する授業と研修会について事前相談
		・iPad 購入と特別支援学級での少人数における活用確認
		・運営協議会の組織構築と委員及び助言者の選定
11		・学校評価アンケート『学び合い』の職員意識調査（2回目）
	15	・宮田中学校の公開授業に職員が参加。 ・中学校の授業参観における『学び合い』について情報交換と討議。 ・西川教授講演及び指導
	27	・道村氏の授業指導と道村式漢字学習法の講演
12	4	・堀内氏による「読み書き」の困難さの児童理解と指導について 講演1：調査シートの分析と個々の理解について助言を受ける
	22	・iPad 活用について、本田氏と村教育委員会加藤が事前相談
	25	・道村氏の授業指導と道村式漢字学習カードの活用の講演
1	9	・本田氏による iPad の活用、有効と思われるアプリの紹介
	12	・堀内氏による「読み書き」の困難さの児童理解と指導について 講演2：本校の実態調査の分析結果の報告と教科に生かす方向性の提案
2	13	・両川氏参観による学級ごとの実態把握援助と講演
	15	・堀内氏によるスクリーニングによる実態把握と分析、指導方法の方向性について確認（指定校教頭、教委推進員）
	27	・道村氏の授業指導と漢字学習成果の確認
3	2	・下山氏と文科省委託研究事業の研究の方向性について確認
	6	・下山氏と学級訪問及び研究事業運営協議会委員との懇談
		・道村式漢字テスト2回目実施 個人学級共に大いに向上した。
		・Q-U（2回目）実施

6. 今後の課題と対応

1. 組織の構築や全体の取組方針が明確でなかったため、実質的な取組が遅れてしまった。また、教職員の理解や周知までに時間がかかってしまった。今後は明確な方針を全体で理解し、年末に行ったスクリーニングや初期調査の結果を生かして 1～3 月の取組を急ピッチで進めた。
2. 発達障害の中でどの特性の可能性があるか、検査や観察、記録分析から考察し、細部を検討して個に合った学習指導方法、教材・教具を見出していく。
3. ICT（電子黒板、iPad）の活用を積極的に進めるために専門家に入ってもらい、個に合った使い方や予復習に使用するなどで学習効果をねらう。
4. 『学び合い』によって伸びた部分「積極性」「関係性」「肯定感」「達成感」等と、伸びなかった部分、さらなる改善部分について明確にして、『学び合い』をアレンジしていくか、教材や教具、教員の対応について研究していくか、全体指導なのか個別の対応なのか見極めていかななくてはならない。
5. 低学年の学習ルールの習慣化は、就学時の資料を参考にして、支援員の補助等バランスよく対応ができて定着しているが、就学以前の生活習慣が 1、2 年は大きく影響してしまうことから、より家庭、保育園と連携した指導が大切である。

7. 指定校について

児童生徒数・学級数・教職員数（平成30年1月1日現在）
（小学校）

指定校名：宮田小学校 校長 宮澤賢司												
	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年	
	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
通常の学級	73	3	88	3	88	3	89	3	88	3	101	3
特別支援学級	8	1	7	1	5	1	4	1	4	1	5	1
通級による指導 (対象者数)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	校長	副校長 ・教頭	主幹教諭 指導教諭	教諭	養護教諭	栄養教諭	講師	事務職員	特別支援教育支援員	スクールカウンセラー	その他	計
教職員数	1	1		23	1	1	4	2	6		3	42

※特別支援学級の対象としている障害種：知的障害、発達障害

※通級による指導の対象としている障害種：

8. 問い合わせ先

組織名：

- (1) 担当部署 宮田村教育委員会 学校教育係
- (2) 所在地 長野県上伊那郡宮田村 7021 宮田村民会館内
- (3) 電話番号 0265-85-2314
- (4) FAX 番号 0265-85-5583
- (5) メールアドレス kyouiku@vill.miyada.nagano.jp